

『奥義抄』序と『和歌現在書目録』序

日比野 浩信

一

六条家の歌人、藤原清輔の著述として伝存しているものが、和歌史上重要視されていることは周知のごとくであろう。その中で初期の『奥義抄』は、平安時代の歌学を知る上で特に重要なものである。にもかかわらず、御子左家の歌学が主として受け入れられていたため、また『八雲御抄』のようなより大規模な既成歌学集成書ができていたため、より詳細な和歌注釈書が成ったためなどであろうか、清輔の歌学書の現存伝本は決して多くはないようであり、『奥義抄』もまた例外ではない。

現在では、『日本歌学大系』が多くの歌学書について最も流布しているが、同大系によって、歌学の大旨をつかむ

ことができるようになり、容易に本文に接することが可能となった今、個々の歌学書についての微細な研究の土台が完成したとみるべきであろう。その一つとして本文の吟味が考えられるであろうが、『奥義抄』の場合、あまり多くはないとはいえ、十数本の伝本の存在が知られており、そのほとんどに対する分類、系統^(一)立てもなされていることから、更には決定的な本文が求められることになるであろう。

本文校訂には、現存諸伝本間における異同調査とその検討が第一の方法であろうが、これには自ずと限界があり、他の文献にも校訂の拠り所を求めざるを得ない。その際、『奥義抄』では、例えば上巻などは、引用される諸歌学書^(二)が有効であろうし、引用歌についても同様、出典となる歌書が参照されることとなるであろう。(ただし、清輔が

用いたと思われる本文の特定という困難な課題もあるが、俗に「清輔本」と呼ばれるものなどは信憑性が高い)。また、釈文についても、それを引用する『袖中抄』や『和歌色葉』などの歌学書に拠って考察することもある程度までは可能であろう。

しかし、序に関しては明確な典拠も、これを引用するものも見当たらない。よって、他に参照すべき文献は、類を同じくするもの、つまり、他歌書の序ということになりそうである。中でも同じ清輔によるものがあれば、類似の箇所などを対象することもできるのではないだろうか。そこで、本稿においては、『奥義抄』の本文校訂の試みの一環として、他文献の拠り所としての可能性を求めることを主目的としたい。特に、清輔が関わるものが知られる『和歌現在書目録』序に注意してみたいと思う。

ただし、序の出典調査や、後世への影響、内容に関して暫く置き、稿を改めて考察したい。

二

まず、清輔自身の序に対しての認識に関する記述を見てみたい。『袋草子』の『和歌序故実』に次のようにある。

維順朝臣語曰、故師^{匡房}曰、和歌序有^二書様^一。学テ可^レ

書事也。其説曰、無^二式法^一、無^二様^一。唯以^レ所^レ記書^レ之。以^二如^レ此之知^一為^二知学^一也云々。況於^二仮名序^一乎。唯任^レ意任^レ口可^レ述歟。但雖^レ然書^二序和歌題等^一、聊可^二分別^一。而可^レ書^レ序バ、イタクタハレズ、ウルハシク可^レ書^三。

具体的には述べられておらず、曖昧なものではあるが、序の書き方が意識されていたことは知られよう。ある特定の序(例えば『古今集』の序)を規範とすべきことなどは記されていない。しかし、規範とすべきものとして『後拾遺集』について触れる記述がある。同じく「雑談」に

後拾遺末代規模集也。雖^レ然彼時^レ有^二種々^一誹謗云々。先序別様云々。次頼綱歌無^二指事^一、多入^レ之云々。予案^レ之不審也。

としている。この記述の後には、頼綱の歌についての評価となるが、「末代規模^⑧」とするとところを見ると、序に関してはその「誹謗」を「不審」としているのとらえてもよいのではあるまいか。序も含めた『後拾遺集』が「規模」とされていると考えて差し支えないであろう。

『奥義抄』の中・下巻は、『万葉集』を中心とした古歌、勅撰集としては『古今集』から『後拾遺集』までの注から成るが、『奥義抄』成立当時、既に『金葉集』は成立していたにもかかわらず、その注はなされてはいない。これよ

り、清輔が『後拾遺集』までを「古典」とらえていたと考えてよいであろうことは、既に指摘のあるとおりである。すると、清輔にとつて古典の下限である『後拾遺集』は大きな位置を占める、意義深いものであるということが言えるのではないだろうか。

これら、清輔の記述をも念頭に置いておきたい。

三

『和歌現在書目録』であるが、その資料的価値は絶大なものである。編者については長らく知られていなかったが、『古蹟歌書目録』に、

和歌現在書目録（四帖 清輔・顯昭・經平朝臣撰之）

又一帖（末書終）

とあることによつて、清輔、顯昭、經平の三人が関与していることが明らかとなつた。この『古蹟歌書目録』は守覚法親王の蔵書目録であるらしく、とすれば、法親王と顯昭の關係は從來述べられるとおりであり、この記述は信用することができるようである。清輔、顯昭の二大歌学者が関与していたことを認めることができるわけである。

『和歌現在書目録』には、まず真名序、そして仮名序の両序が置かれているが、

真名序土代暫読之。清書時可破却歟。

とあることから、両序の正副關係は明白である。ここでは真名序はあくまで副、仮名序を正と考えることとする。

この序の筆者についてであるが、從來あまり注意されていないようであるので、その点から考える必要があると思われる。

まず、先の引用の中に「清書時可破却歟」とある。仮名序、真名序が別々の作者によるものであれば、一方を「破却」するようないふことが平然となされるであろうか。仮名序と真名序は同一作者によるものであるとみるのが、穩当のようである。

また、「みるめをもとめむものは、ちひろの海のそこまでもかつけとて、花す、きはのみたる物を、もしは草かさあつめて」や「た、ししつのおのいやしく、あつまめのかたくなにて、人しられぬたくひをは、かならずしもこれにつくさす」などの記述から推察するに、目録の作成に携わった人物による序であることは想像に難くない。名のあげられる三人のうち、經平については判然としない。清輔、顯昭については今更論するまでもなく、やはり、この二人が目録の作成の主要人物であり、どちらかが序を執筆しと考えて差し支えないであろう。清輔は顯昭の兄であり、その清輔を差し置いて弟顯昭が表立つであろうか。また、清

輔は年長であるだけでなく、このころは既に歌人として、歌学者としての名声は大いなるものがあり、歌壇の重鎮的存在であつたことはいふまでもない。実質的に編纂に当たつた人物はともかくも、中心的存在は清輔であつたと見てはば間違ひのないのではなからうか。中心人物が序を執筆することは大いに考えられるであらう。よつて『和歌現在書目録』の序は清輔によつて書かれた可能性が高いことが推察される。

仮名序とその土台である真名序を比較してみると、おおむね、流れは似ているが、大きく異なる箇所も散見する。例えば、真名序に

九品十體区分、先賢之心難測。十五、三十六相對。後生之眼易迷者乎。

とあり、これは『和歌九品』や忠峯、道済の『十體』、そして公任の『十五番歌合』『三十六人撰』を指すのであらうが、仮名序にはこれらの名称は見当たらない。また、真名序に

如斯等累代遺文、諸家秘思、不載目錄、爭知部数。一切經見在書各有目錄。和歌通我國詩、何無目錄。

のようにあり、『一切經目錄』^{（十一）}や『日本国見在書目錄』に倣つたかと思受けられる一文がある。特に『日本国見在書目録』は、『易家』、『尚家』以下、四十の「家」に分類さ

れていることなどからも認められ、既に指摘されているとおりである。しかし、仮名序にはこのような記述はない。替わりに、少々長いが引用すると、

このほか花のかけ紅葉のもと、月のまへ雪のうちのことは、さまざまのことわさいくそはくそ。たとへは塵のつもりて山となり、露のした、りて波をたふふるかことし。ちかころこのみちみさかりなるをや。鳥しぬる時は聲うるはしく、ともし火きえむとて光をます。かなしきかなや、歌のめのまへにうせなんとするなり。今の世の人はこのむとすれと、た、案のほとりをのみ、て、はこのうちをはしらせは、これらのたくひ、谷のむもれ木やうやく朽うせて、みねのかすみあとなく成なむことの思出、をのつからすたれたるをおこし、たえたるをつく世もあらは、これをしるしの杉にて、みわの山のおくまでもたつねわたる。みるめをもとめんものは、ちひろの海のそこまでもかつけとて、花す、きほのくみたる物を、もしほ草かきあつめて、かすの家をたてあまたの事をこめて、和歌現在書目録となつく。

として、和歌の衰退を嘆き、惜しみ、見聞したものを集めたという意の文がある。これらを見ると、必ずしも「土代」に忠実に仮名序が書かれているとは思われない。仮に清輔

が「土代」を書いたとして、この仮名序の自由な改作は先に引用した『袋草子』の「唯任意任口可述歟」に符号するものといえるのではないか。

ただ、両序にみられる相違は単に口に任せた自由な改作とだけ言いされるものではなさそうである。両序執筆時期が異なることも原因の一つとなっているのではなからうか。真名序では「干時仁安之年夷則之月」とし、仮名序には「人のやすけき年、神まさぬ月のころほひ」とあり、年は同じながら、七月と十月とで三ヶ月の違いがあるのである。また、真名序には、目録の内容と一致しない箇所もある。目録の欠落部分に記載されていたかも知れないものはさておき、確認できる範囲でいうと、真名序に

或称樹下山伏之集、或曰発心悦目之抄

とある。このうち、『樹下集』『山伏集』『悦目集』は記載されているが、『発心集』の名はない。これに引き換え、仮名序に見られる書名は、確認できるものに関しては、すべて目録に記載されている。内容と矛盾しないことも「正」である仮名序の改作の一要因となっているかもしれない。

序には直接関係はないようではあるが、『和歌現在書目録』には、明らかに増補が認められる。序の後に、

撰集家（廿二部）

抄集家（十八部）

類聚家（八部）

髓脳家

（以下略）

とあるが、実際には「撰集家」には二十三部、「抄集家」には二十二部、「類聚家」には十部の書名が記載されている。それぞれの過剰分を抜き出すと、（便宜上、通し番号を付す）

（撰集家）

二十三 今撰集。（上中下顕昭）

已上十六部私撰^{（十五）}

（抄集家）

十九 蓮露集。（上中下。或僧侶集。諸集哀傷部）

二十 一字抄。（諸句題。清輔朝臣。）

二十一 恋部集。（作者可尋。）

二十二 桑門集。（古今僧侶歌。有序。顕昭撰。）

（類聚家）

九 題林。（歌合卅卷。歌会卅卷。百首歌卅卷。雑々卅卷。合百廿卷。二条院召了。清輔朝臣。）

十 諸家集部類。（作者可尋。在富家人道殿。被伝獻故左府云々。）

が、後に増補されたものであるらしい。この中で、「抄集家」「類聚家」の項に清輔の書『一字抄』『題林』がそれぞれみられ、「撰集家」「抄集家」の項に顕昭の『今撰集』『桑門集』が、それぞれあげられている。増補される七書のうち四書までが、当事者二人の書であることは注意すべきである。「抄集家」で『桑門集』を最後にあげることから考

えるに、顕昭あたりによって増補されたものかと思われる。本書の持つ「現在書」の「目録」としての性質上、新たに存在を知った、あるいは新たに書き著した書を増補することは、極く自然のことであろう。

ともあれ、以上のことから「和歌現在書目録」の序は清輔によるものである可能性が高いということがいえるのであるまいか。

「和歌現在書目録」の序が清輔の手によるものであるならば、「奥義抄」序の本文校訂の一助とすることもできる、ということになりそうである。

四

『奥義抄』が清輔によって書かれたものであることは、以前には疑われたこともあったようであるが、現在では認められている。その署名は「前和歌得業生柿下躬貫撰」となっているが、顕昭の「袖中抄」などの逸文、「八雲御抄」や「和歌現在書目録」などの記述によっても、清輔の著述であることは明らかである。他にも清輔の特徴ある署名を列挙してみると、

①前和歌得業生柿下躬貫

②前和歌得業生山辺宿祢

(奥義抄)

(袋草子所收入磨勘文)

③和歌得業生清輔

(保元二年本古今集識語)

④柿本末生清輔

(承安三年本後撰集本奥書)

など、すべて同趣の署名であろう。なお、蛇足ながら、これらいわばペンネームを年代順に並べてみると、①②③は「和歌得業生」が一致する。③においては「前」の文字が冠されていないが、この①②は先代の著名歌人の名を借用しているもので、①では人麿、躬恒、貫之の名を織り混ぜたものが、②ではそのまま山部赤人に擬するかのときである。先代歌人の名であるために「前和歌得業生」としているであろう。これが、③④では本名を名乗るが、③は、自らを「和歌得業生」と称しているのであり、④に至っては自分を歌聖人麿に続く歌人として位置付けているかのようになさえみられる。①④に至る過程において、当初は遠慮が見受けられる清輔が、次第に歌人、歌学者として認められ、自信を付けていった様子がうかがわれるようで、興味深いことのように思われる。

さて、この「奥義抄」序と「和歌現在書目録」仮名序が共に清輔のものであるとして、照査してみたい。よく似た表現や語句が散見するようである。

奥義抄

和歌現在書目録

①

たのしびさかえの所、なげ

それよりして男をんなのな

きかなしびの時にも必ず出て、いはんや男女の心をやはらくるなかだち、これよりよろしきことはなし。

② 御歌のふみ式は、光仁の御代に参議藤原の朝臣淡成みことのりをうけたまはりて作れる歌式、若は石見女髓脳などいひて、家々の教ま、傳はれり。

③ 集はおはやけには奈良の御時の萬葉集をさきとして、拾遺及び金葉集にいたるまで世々にえらび給へり。

④ 私には山上憶良類聚歌林より新撰萬葉集天神御撰俗号樹下集法眼源賢撰といふまでに思ひくゝのしわざしげく聞ゆ。

かにも、たのしみかなしみのうちにも、まついてくるなかつたちと成にけり。

又光仁天皇はみことのりをくたして歌標をたて、喜撰法師は勅をうけたまはりて髓脳をつくれり。

奈良の御門萬葉をえらび、醍醐村上のひしりのみよにもおこしたまひ、花山白河のかしこき君もわすれたまはす。

憶良臣歌林をあつめしよりは、
わたくしにはこのものと集。
やまふしかしわさといひ、

⑤ 此外の家集、柿本山邊氏をはじめて海手古良師氏大豊蔭一條播廬主増基らに及ぶまで、いくそばくぞ。

家の集は赤人々丸をさきとして、黒主庵主までにと、め置り。

⑥ わづかに見たる所だにうもれ木いたづらにくちむやとはとて、野べの草かきあつむるは賢き人のためにはあらず、愚なるたぐひにそなへむとなり。わかちて三巻なずけて奥義抄と云ふ。

これらのたくひ、谷のむもれ木やうやく朽うせて、もしほ草かきあつめて、かすの家をたて、あまたの事をこめて、和歌現在書目録となつく。

このように、掲出する書名や表現などに類似点がいくつも見出せるようである。全く同一ではないので、断言はできないが、わずかな分量を占めているにすぎない序の中に、これだけの類似点が存するということは、二書がいかにも関連深いことを思わせるものではあるまいか。先に『和歌現在書目録』の仮名序が清輔の手に成るものではないかとの推察をしたが、同一作者によるものであるからこそ似たものになるであろうし、逆に似ていることを理由に同一作

者である可能性を首肯することができないのではないだろうか。

清輔の序と他の序とを比較してみると、やはり『後拾遺集序』は注意すべきであろう。特に、歌書名を挙げての和歌通史的記述がみられるところは注意すべきであろう。『後拾遺集』序では撰集範囲として歌書名を提示することが、結果的に和歌史を通観しているようなことになるのであるが、仮に古今集序において和歌史が述べられようとした時、前史の書名としてあげられるのは万葉集を置いて他にはほとんど無いに等しいのである。『後拾遺集』撰集の頃には歌書として既に勅撰三代集が有り、貫之の『新撰和歌』や公任の秀歌撰をはじめとする、数々の私撰集等が存していたわけである。『奥義抄』は特に上巻における、既成歌学集成としての性格上、『和歌現在書目録』はその内容からも、序において以前に存する歌書名に触れる必然性があつたわけである。その際、序の中に多くの書名をあげる『後拾遺集』序は、清輔の脳裏にあつたのではないか。

三書の序に掲げられる注意を要すると思われる書名をあげると次のようになる。

喜撰式	歌經標式	奥義抄序	目錄仮名序	後拾遺集序
	○	○	○	

石見女體腦	萬葉集	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	三十六人撰	十五番歌合	和漢朗詠集	和歌九品	深窓秘抄	金玉集	玄々集	類聚歌林	新撰万葉集	新撰和歌	麗花集	樹下集	山伏集	人麿集	赤人集
○	○			○		○								○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○				△(真名序)					○(真名序)	△(真名序)	△(真名序)	○(真名序)	○(真名序)	○(真名序)	○
		○	○	○	○																

海	手	古	良
豊	蔭		
庵	主	○	○
黒	主	○	○
		○(真名序)	○(真名序)

(※) △は『和歌現在書目録』の真名序のみにあるもの
清輔が『後拾遺集』及びその序に属目していたことなどは極く当然のことと今更論ずるまでもない。『和歌現在書目録』にも、『後拾遺集』序を参照したとする証左は存するようであり、『抄集家』に

麗華集一帖(不知撰者之趣。見後拾遺序)とある。これによっても看取されよう。

更に、『山伏集』に関する記述には問題があるようである。

『和歌現在書目録』仮名序には、

わたくしにはこのものと集、やまふしかしわさといひ、色々なることの葉多かり。

とあり、真名序では「或称樹下山伏之集」とある。この「やまふしがしわさ」は、ともすると、「このもと集」の説明文として誤解されかねない。つまり、「山伏のしわざである樹下集」と読み取れてしまうのである。『樹下集』の作者が「山伏」などではないことは明白で、『奥義抄』序にも「法眼源賢撰」とあるし、『和歌現在書目録』「撰集家」にも

樹下集廿卷。

多々法眼源賢撰之。有仮名序。

とされているのである。また、『山伏集』に関しては、

山伏集。(撰者不分明。)

としている。これをみても『樹下集』と『山伏集』が明確に区別されるのは当然であろう。では、なぜ「やまふしがしわざといひ」などと表現されたのであろうか。それは『麗花集』同様、『後拾遺集』序によるところが大きいと考えられるのである。『後拾遺集』序には

また、うるはしき花の集といひ、あし引の山ぶしがしわざとなづけ、うゑきのもと集といひ

のようになるのである。これならば、「山ぶしがしわざ」と「なづけ」られた、すなわち『山伏集』の書名が明瞭に読み取られる。これをそのまま借用したのが『和歌現在書目録』仮名序にみられるような記述となった原因と考えられるのではないか。

因みに、顕昭の『後拾遺抄注』では、

ウルハシキ花ノ集トイヒ、アシビキノヤマブシガシワザトナツケ、ウエキノモトノ集トイヒ、アツメテコトノハイヤシク、スガタダビタルモノアリ。

麗花集ナリ、樹下集ナリ、源賢法眼撰之云々。

と注を付す。『麗花集』『樹下集』の書名、後者に至っては

撰者についてまで言及しているにも関わらず、『山伏集』の名は注されていないのは不審である。『後拾遺抄注』はその奥書によれば、仁安年間（一一五一—一一五三）に成った『和歌現在書目録』よりも十五年程後の寿永二（一一八三）年に仁和寺の塔頭、勝功德院に注進するために編まれたことが知られる。『和歌現在書目録』はその書名から、当時現存していた歌書の目録であると考えるべきであり、ここにも『山伏集』の名が記されているところを見ると、『山伏集ナリ』などの注記がないのは、単に顕昭が書き漏らしたものと考えられる。あるいは、『樹下集』や『麗花集』は顕昭の歌学書に引用されていることが認められるが、『山伏集』の引用には属目していない。顕昭が引用、注記の必要性を感じなかったためかもしれない。推測するに留めておきたい。

いずれにせよ「わたくしにはこのもと集、やまぶしがしわざといひ」は、『後拾遺集』序の「やまぶしがしわざとなづけ」を元として導きだされた表現なのではないだろうか。

このように考えてみると『和歌現在書目録』序の記述が、少なくとも部分的には『後拾遺集』序を参照したものであることが概ね認められるのではないだろうか。

五

さて、先の表に示した本文は、『奥義抄』は『日本歌学大系』に、『和歌現在書目録』は『続群書類従』に拠ったが、共に両書の最も多く用いられている本文であろう。ここで始めに提議した本文校訂に関して触れておきたい。それは⑥の部分である。『日本歌学大系』では

わづかに見たる所をだにうもれ木いたづらにくちんやはとて・・・

とあるが、これは底本である志香須賀文庫蔵（九条家旧蔵）本に

わづかにみたる所をたにむもれ木いたづらにくちんやはとて・・・

とあることに拠るものであろう。管見に入った他の伝本の本文は、

わづかにみたる所をたにむもれ木いたづらにくちんやはとて（志香須賀文庫蔵本）

わづかにみたる所を谷の埋木いたづらにくちんやはとて（宮内庁書陵部蔵本）

わづかにみたる所をたにのむもれ木いたづらにくちんやはとて（豊橋市立図書館蔵本）

わつかにみたるところをたにのむれ木いたつらにくたさむやはとて（内閣文庫蔵零本）

わつかにみたる所を谷のむれ木いたつらにくたさむやはとて（京都女子大学蔵本）

わつかにみたるところをたにのむれ木いたつらにくなんよりはとて（慶安五年版本）

（以上、川上氏分類のⅠ類（流布本系）^{三十一}）

わつかにみたる所はたむれ木いたつらにくちんよりはとて（大東急記念文庫蔵本）

わつかにみたるところを谷のむれ木いたつらにくちよりはとて（内閣文庫蔵抄本）

ワツカニアタルトコロヲタニノムモレキイタツラニクチムヨリハトテ（国立歴史民族博物館蔵本）

（以上、川上氏分類のⅡ類（異本系））

のようになっている。所々、小異はあるが、今問題としている箇所に関しては底本以外の諸本はほとんど「たにの」というように「の」字が入っている。

『和歌現在書目録』序は、明らかに『奥義抄』より後に成ったものであるので確たる論拠とはすべきではないが、同じ清輔の手になるものとして参考にはなるであろう。これには

これらのたくひ、谷のむれ木やうやく朽うせて、

のようにある。他に東京大学図書館蔵本、彰考館蔵本、天理図書館蔵本を参照したが^{三十二}、この箇所には異同はない。

「谷の埋れ木」が「朽ちる」という表現は和歌にも見られる。例えば、

年ふれど人もすさめぬわがこひやくちきのそまのたにのむれ木（顕輔集二九）

つれなくていまもいくよの霜かへんくちにし後の谷の

むれ木（拾遺愚草二七一八）

人しれずくつるたぐひや我が袖にくらぶの山の谷の埋

木（壬二集五九七）

など、少なくはないようである。ここに引いたものは『顯輔集』を除くと後世のものであるが、「埋れ木」が「朽ちる」とするものや「谷の埋れ木」という表現は、これ以前にもある。しかし「谷の埋れ木」が「朽ちる」とするものはこの頃より多くなってくるようである。

ここでも、「谷の埋れ木」は「朽ちる」の縁語的表現としてとらえるべきであり、「わづかに見たる所を、谷の埋木いたづらに朽ちんやはとて・・・」とあるのが妥当であるように思われる。

更に、本文校訂という立場から見ると、『暮春白河尚齒会和歌并序』が参考にできるようである。その署名は「前大長秋内給事藤原清輔 六十九」とあり、清輔の手に成る

ことは明らかで、その晩年の著述であることは、最も早く成った奥義抄とは対照をなすものである。

同序は、前出の二書とは、内容も意図するところも全く異なり、明確な共通点はほとんど見当たらない。しかし、末尾に

清輔むかしは秋のみやまべのくさのうちにかずまへられて、おのづからいろいろめかしきことの葉もいへりけん、いまは日くれ道とほきなげきにそみて、はるのころもわすれはてにしも、ちとせにひとたびあへる事のよろこばしさに、よろづよまでのあざけりをのこしつるをなんはぢおもひけると、しかいふなり。^(三十一)

というような、清輔の謙遜の意を表した記述があるが、『奥義抄』序にも同様の意趣と見られる一文がある。『日本歌学大系』に

たゞしきたまをみがくほまれなくて、くひぜをまもるあざけりあらむことをしらで、はかりおもふべしといへり。

とする箇所である。このなかの「はかりおもふ」が、諸伝本では次のようにある。

くひぜをまもるあさはかりあらんことをしらではかりおもふへしといへり(志)

くひぜをまもる嘲あらんことをしらではかりおもふへし

といへり(書)

くひぜをまもるあざけりあらんことをしらではかりおもふへしといへり(豊)

くひぜをまもるあざけりあらむことをしらではかりおもふへしといへり(内零)

くひとをまもるあざけりあらむことをしかてはちをおもふへしといへり(京)

くひぜをまもるあざけりあらむことをしらではち思へりといへり(版)

(以上、I類)

くひぜをまもるあざけりあらんことをしからはちおもふへしといへり(東)

くいせをまもるあざけりあらむことをしかのはちをもふへしといへり(内抄)

クヒセヲマホルアサケリアラムコトヲシカクハチヲモフヘシトイヘリ(歴)

(以上、II類)

底本以下、何本かには「はかりおもふ」とあるが、「はちおもふ」としているものもある。同一作者の、同一の意向を表す文章としては注意すべきであり、ともに、後世の「あざけり」を「恥じる」というものであろう。「か」と「り」が近接して書かれていたために異同が生じたと考えられよ

う。これは「株を守る嘲あらんことを知らで、恥思ふべしと云へり」ととらえるのが適當ではあるまいか。

また、川上氏分類のⅠ類、Ⅱ類ともに「はちおもふ」とする伝本が存することとなるが、流布本、異本の両系統に共通する本文が元来の本文であり、この「はちおもふ」に関しては誤写による異文であると考えて差し支えないのではなからうか志香須賀文庫本、書陵部本、特に豊橋市立図書館本、内閣文庫零本の関係については私見を述べたことがあるが、これら四本が、諸伝本の中でも近しい関係であることが、ここからも推測されるであらう。

ほんの一字、二文字の違いであり、これが正されたとしても大きく意味が変わるわけではない。しかし、現存伝本による本文校訂には限界があり、利用できる他文献をも参照すべきであると考え、敢て試みた次第である。

六

以上述べたように、『和歌現在書目録』の序は清輔によるものである可能性が高く、『奥義抄』序と比較してみると、類似した箇所なども散見するようである。また、特に『和歌現在書目録』仮名序は『後拾遺集』序が念頭に有ったらしく、部分的には拠り所としているようである。

『奥義抄』は伝本もそれほど多くはなく、他の文献をも本文校訂の際に参照すべきであると思われるのであるが、『和歌現在書目録』仮名序などは、その一助となるものであると考えることができるのではないだろうか。

他にも『奥義抄』については、問題とすべきところは多い。序だけをとっても、例えば他の多くの歌書の序などに見られる類似の語句、表現などを詳査すべきであらうし、細部にわたる本文校訂の必要もあらうが、すべて稿を改めて検討したい。

御教示、御叱正乞う次第である。

注

(一) 伝本の分類に言及する御論考として、久曾神昇氏「奥義抄に就いて」(『立命館文学』巻四号)、『日本歌学大系』第一巻解題

原田芳起氏「大東奥義抄管見」(『かがみ』八)

川上新一郎氏「奥義抄伝本考」(『斯道文庫論集』第二十四号)

がある。特に川上氏の御論考は前二氏の対象とされた伝本だけでなく、現存伝本のほとんどすべてに対して詳査され、系統論としては最も穏当なものである。

(二) ただし、『袖中抄』や『和歌色葉』に引用される『奥義抄』本文は現存諸本とは、必ずしも系統を一にしないも

のであることは、川上新一郎氏によって検討されている。

(三) 『袋草子』の引用は日本歌学大系による。

(四) 清輔の言う「末代」は、芦田耕一氏に御論考（『袋草子』における末代）（『中古文学』第三十号）があり、同一箇所を引用され、

後拾遺集（一〇八六年成立）は「末代」において手本、規範となる勅撰集であると言うのだが……当代は末代であるので後拾遺集が模範となるのである。

としておられる。

(五) 西村加代子氏「古き詞の時代を慕って」（山本一氏編『中世歌人の心』（世界思想社）第一章）

(六) 『和歌現在書目録』に早く言及したものに佐佐木信綱氏『日本歌学史』がある。『和歌大辞典』『日本古典文学大辞典』などにも解題がある。但し、佐佐木氏は本書の成立を「仁安元年」とされるが、井上宗雄氏が指摘されたように、元年とは限定できない。（藤原清輔伝に関する二、三の問題と和歌一字抄と）（『国文学研究』二十五）

(七) 太田晶二郎氏「桑華書志」所載「古蹟歌書目録」（『日本学士院紀要』第十二卷第三号）

(八) 同右

(九) 橋本進吉氏「法橋顕昭の著書と守覚法親王」（『史学雑誌』第三十一篇三号）、久曾神昇氏「顕昭・寂蓮」など。

(十) 『和歌現在書目録』の引用は『統群書類従』による。

(十一) 井上宗雄氏はこの経平について、

経平は伝不明。承安二年十二月広田杜歌合の、尊経閣蔵俊成筆本には経尹とある作者が、愚昧記紙背本では経平とある由だが（歌合大成の翻刻による）、これであろうか（賀茂政平の一族？）。経尹なら藤原氏、物かはの藏人である。

としておられる。「物かはの藏人」経尹ならば、少なくともも歌人として知られた人物であることにはなる。

(十二) 『暮春白河尚齒会和歌并序』には、

次に清輔年六十九くらゐのきぬ、あをにびのさしぬきにしたがさねをきたり、おびをさし笏をもちたり、さか見るところあるゆゑなり、季経朝臣くつをとる、大弐卿したがさねのしりをとりてはしのもとにいたりておく。四位のしたがさねのしりを三位のとりしむかしもきかず、これはよはひをたふとびみちをおもくするあまりなり、見るものめをおどろかしなみだをのこふべし、

とある。これは、『和歌現在書目録』（一一六六—一一六八）より約五年後の承安二（一一七二）年三月十九日のものであるが、既に清輔の名声は高かったと見て差し支えないであらう。

(十三) 「一切経目録」は『国書総目録』によれば、穂久述文庫に所蔵されているが、未見である。

(十四) 注六の解題など。

(十五) ここに「十六部私撰」とあるが、この数字に矛盾はない。恐らく増補と同時に書き直したのであろう。

(十六) 例えば、藤岡作太郎氏『日本評論史』（藤岡作太郎博士著作集第三冊、岩波書店刊による）

(十七) 黒主の家集が存することを聞かない。『古蹟歌書目録』などにもその名は見えず、不審である。「庵主」に引かれたの記述であろうか。『和歌現在書目録』には「家集家」を含む「歌合家」以下が欠落しており、確認できないことが惜しまれる。ただ、「黒主」をいわゆる六歌仙の一人、大伴黒主であるとする、「赤人々丸をさきとして、庵主黒主までにと、め置き」とする、「と、め置き」では不適当なものとなる。疑問が残る。

(十八) 『新編国歌大観』による。

(十九) 『日本歌学大系』別巻四による。

(二十) 注一、川上氏論文

(二十一) 『続群書類従』本と東京大学蔵本、彰考館蔵本の関係については、太田氏前掲論文の補注、井上宗雄氏「藤原清輔の生涯」（『立教大学日本文学』第八号）に付載される「清輔編著伝本書目」に言及される。

(二十二) 『新編国歌大観』による。

(二十三) 「豊橋市立図書館蔵『奥義抄』について」（愛知淑徳大学国語国文）第十四号）、『奥義抄』巻頭の目次について」（同第十六号）で触れた。

（大学院博士後期課程二年）